Vol.6 ●とじこみスペシャル

COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド



コミックと小説の新コーナー、絶好調です!!

RPGやAVGのようにハラハラドキドキコンピュータ・ゲームよりも面白いコミックスや小説が読みたいっ!!そんな欲ばりなあなたのためにスタートです!!

CONTENTS

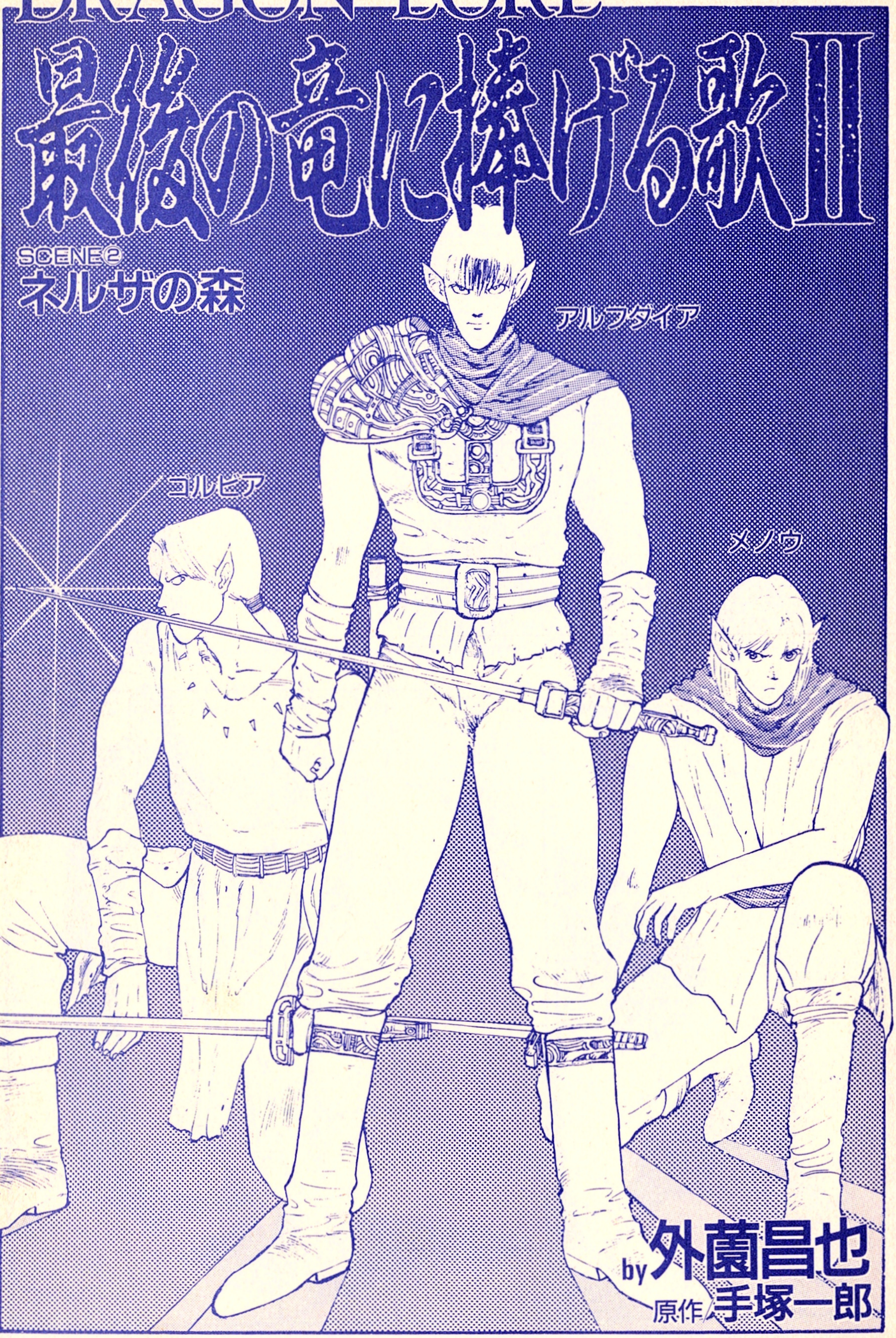
ウィザードリィ外伝「鳳凰の塔」は今回お休みです。

FANTASY LAND

グレイとシーマの旅は続く!!　好評第2回!!

DRAGON LORE
最後の竜に捧げる歌II

SCENE2
ネルザの森

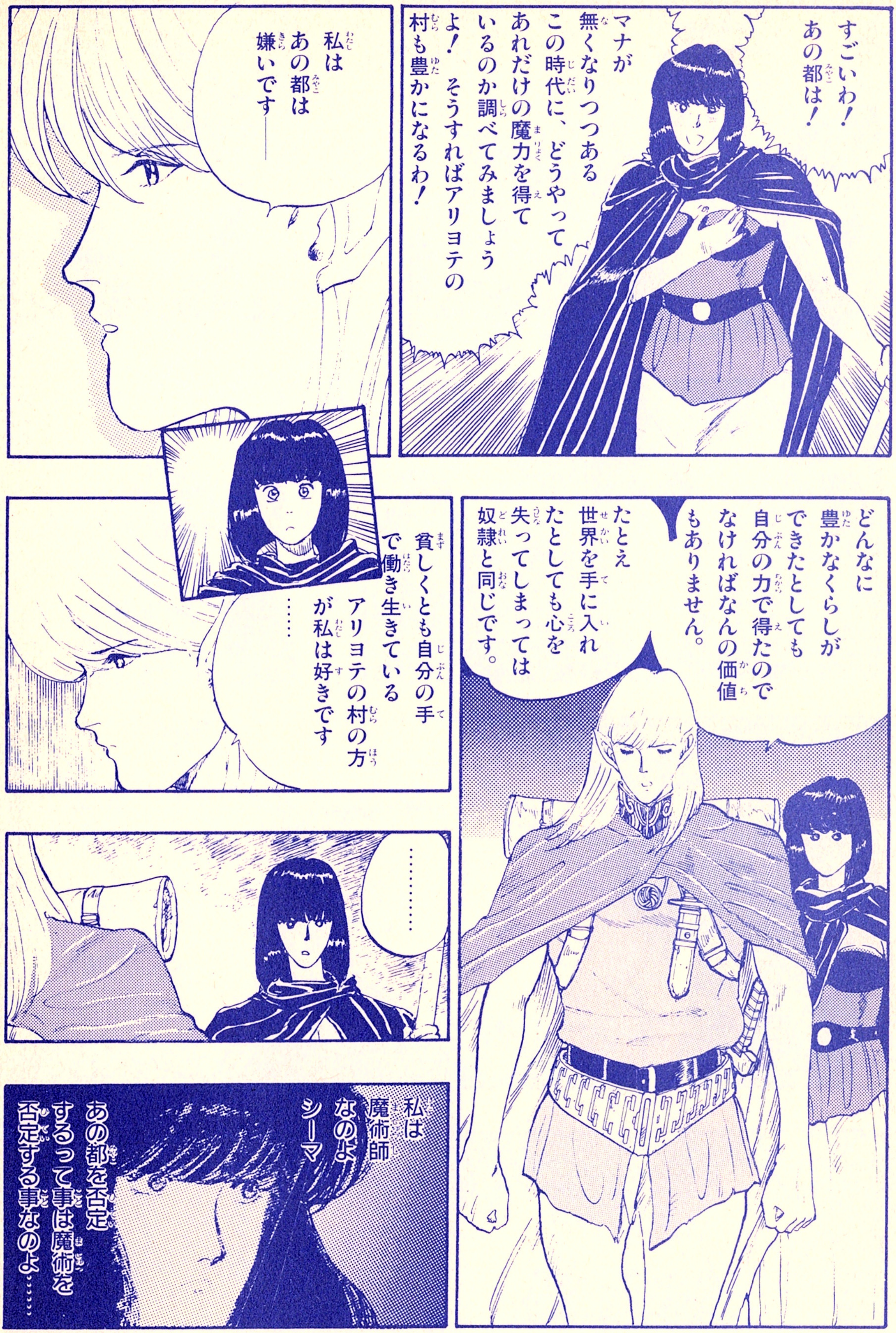


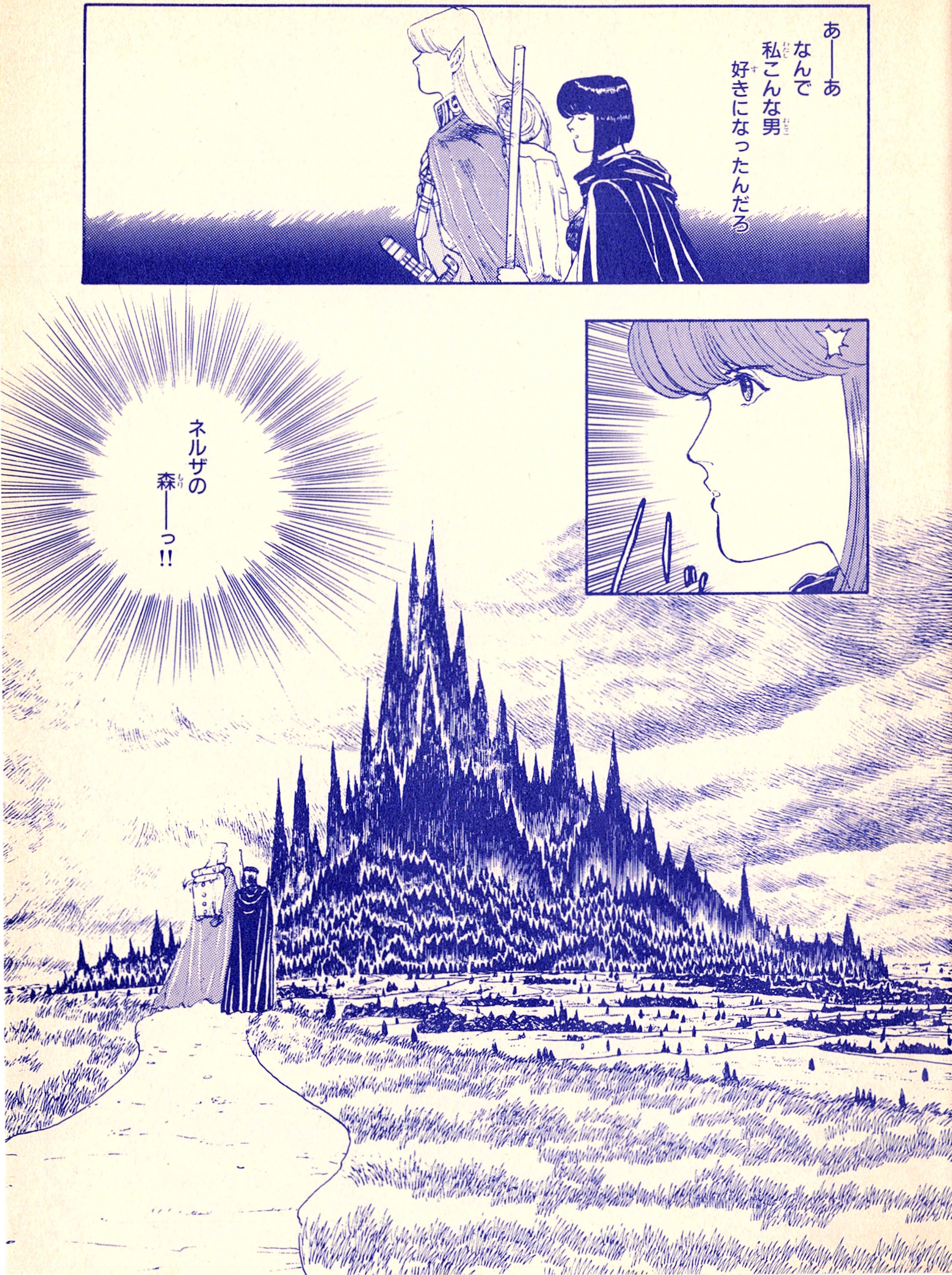
by 外薗昌也
原作／手塚一郎

●前回までのあらすじ／妖精族のシーマと女魔法使いのグレイは、すべてを呑みつくす死の砂漠「大喰らい」の拡大を止めるべく旅を続けていた。グレイはマナが枯渇しない不思議な都市、真実の都を訪れシーマが「取りかえっ子」だったことを知る。


ザッ
ザッ
ザッ


シーマ……お母さんの事聞かないの？
………
やっぱり怒ってる？私が勝手にお母さんに会いにいっちゃったこと……
………
あの都にあなたのお母さんがいるって聞いて居ても立ってもいられなかったの！
だって、あなたのお母さんって事は私にとってもお母さんって事で…
ご、ごめん私ってば——
ドキ
あの都、どう思います？
び、びっくりした——！
どっ
どうって…


すごいわ！あの都は！
マナが無くなりつつあるこの時代に、どうやってあれだけの魔力を得ているのか調べてみましょうよ！ そうすればアリヨテの村も豊かになるわ！
私はあの都は嫌いです――
貧しくとも自分の手で働き生きているアリヨテの村の方が私は好きです……
どんなに豊かなくらしができたとしても自分の力で得たのでなければなんの価値もありません。
たとえ世界を手に入れたとしても心を失ってしまっては奴隷と同じです。
…………
私は魔術師なのよシーマ
あの都を否定するって事は魔術を否定する事なのよ……


あ――あ
なんで私こんな男好きになったんだろ
ネルザの森――っ!!




このネルザの森でね
先生について10年も修行したの
なつかしいなぁ——っ
その先生というのはどんな方なんですか？
フレシア・ウィン・ステリック
すごい先生よ！今年で93になるかな
偉大な精霊使いで錬金術師としても一流なんだから！
錬金術……あの普通の金属を黄金に変えるというあれですか
ええ
そういえば私といっしょに弟子入りしてたアクィナスはどうしてるかなぁ
アクィナス？
ええ
錬金術を先生に教わっていたの
その腕は先生を負かしそうな位までいってたんだけど


錬金術の闇の部分に引かれはじめたからとかで一方的に破門されちゃって…それきり会ってないの
私にとってフレシアが父のような存在だったらアクィナスはちょうど兄のような存在だった
やさしくて明るくて私いつもからかわれてばかりだったけど　私大好きだったんだ……
闇の世界──？
私にもよくわかんないの
卑金属を金に変えるというのは錬金術の表の姿
その本質というのは不完全なものを完全に昇華させる魔術のメソッドだってよくいってたなぁ
その闇の世界ってのには　どんな意味があるのかしら──？
ザッ
ガッ

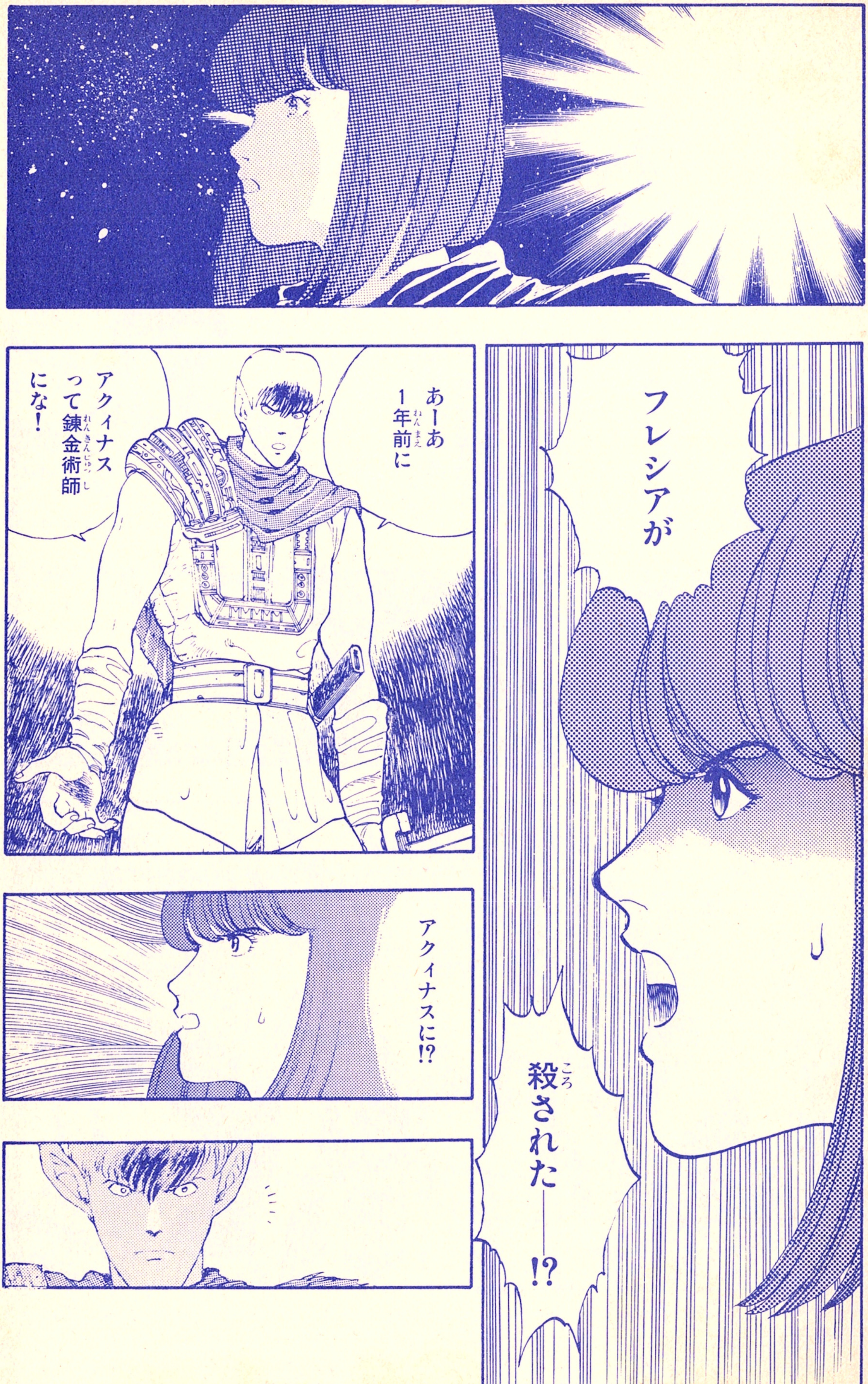

走って!
えっ!?
くそっ 気づかれた!
追えっ


エルフ!?
この森全てにはオレの部下が配してある！
逃げられはせぬぞ！

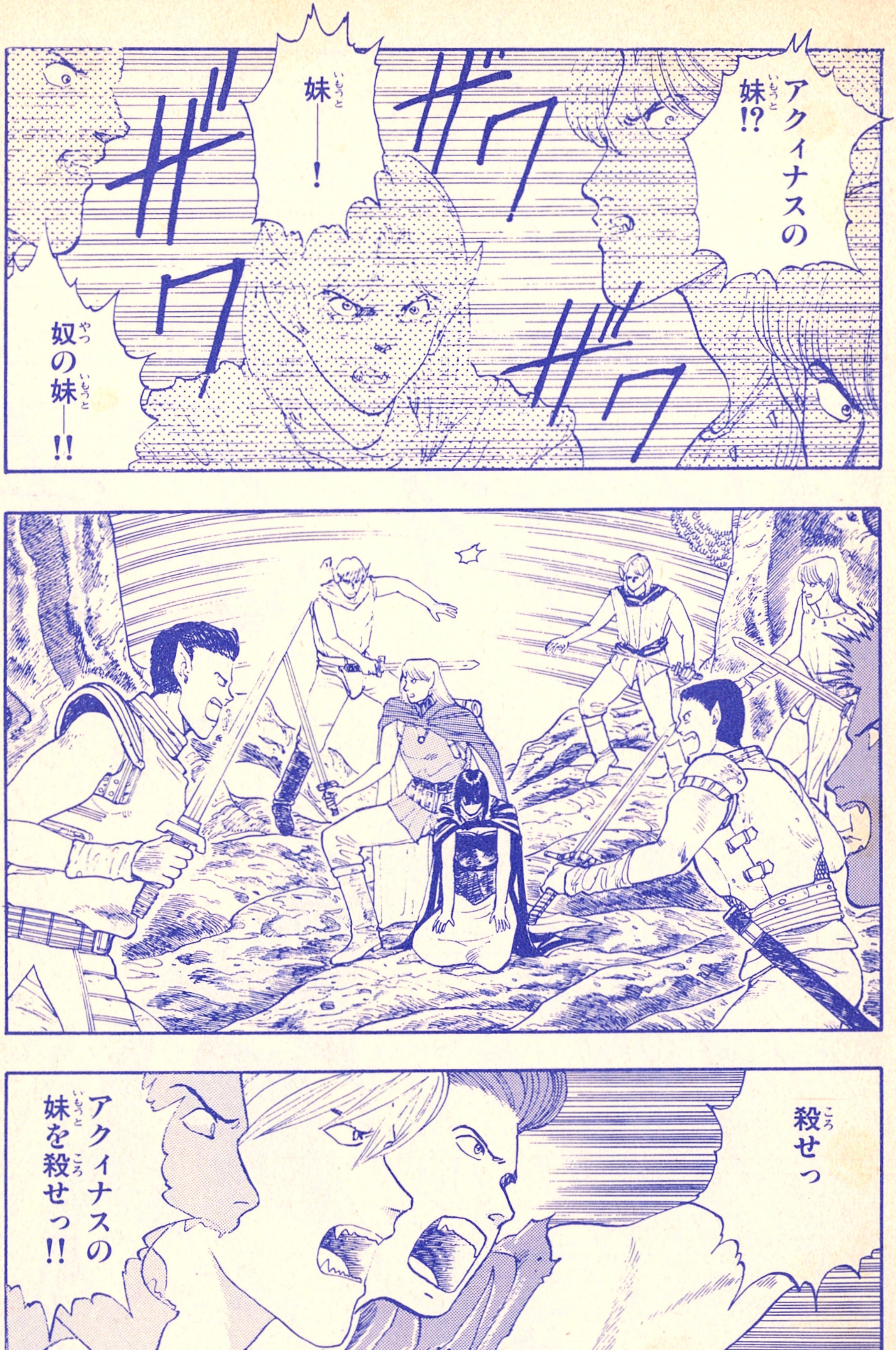

ザザザ
手間かけやがって!
ハァ
ハァ
メノウ お前らしくもないな
くっくっくっ
けっ
なんなのよ あなた達は—っ
オレの名はアルフダイア!
お前は見たところ魔術師のようだが……

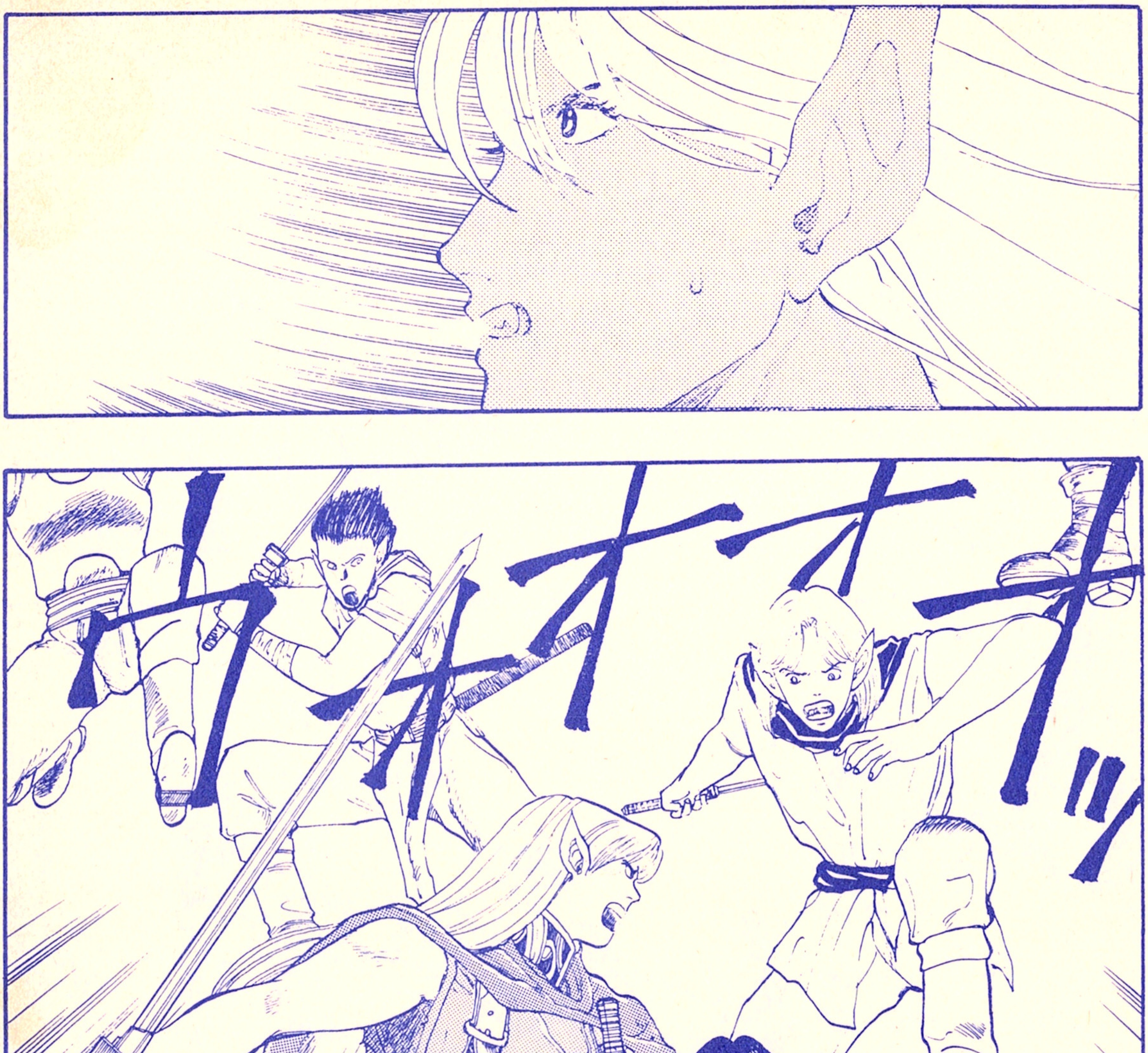


そうよ
それが
どうしたの
魔術師は
この森にいちゃ
いけないとでも
いうの!?
その通り
だ
ちょちょっと
待ってよ
この森には
フレシア・ウィン・
ステリックって
大魔法使いが
いるじゃないの──
フレシア……
そう
フレシア・
ウィン・ステリック
よ!
私達は大喰らいを止める術を
フレシアに教えてもらいに
ここまで来たのよ!
残念だったな
フレシアは殺された


あーあ 1年前に
アクィナスって錬金術師にな!
フレシアが
殺された――!?
アクィナスに!?


アクィナスが先生を――!
グレイ!
お前アクィナスを知っているのか?
え、ええ…
私の兄よ……!
ザワッ


アクィナスの妹!?
ザワ
ザワ
妹――!
ザワ
ザワ
奴の妹――!!
殺せっ
アクィナスの妹を殺せっ!!



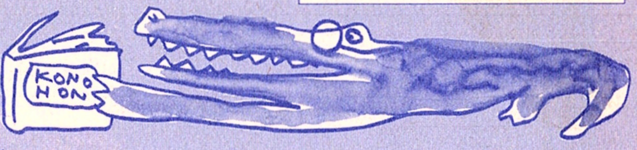
大魔法使いフレシアを殺したのはグレイの兄アクィナス?! 次号を待て!!

次号(Vol. 7 3月16日発売)につづく!!

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

この本を読め!!

by柴尾豊太郎



第二回『花と火の帝』
隆慶一郎著　日本経済新聞社

ファンタジーファン必読の時代小説なのだ

「最近、なにかおもしろい本、読んだ？」

顔をあわせれば、かならずこんな話をはじめる仲間たちが、その夜はぼくの部屋で酒を飲んでいた。去年の十一月のはじめのことだった。

その夜の話題は「影武者徳川家康」で脚光を浴びた作家、隆慶一郎氏の作品をそれぞれがどれだけ読んだか、その一点に集中していたといっていいだろう。

彼の作品はとにかくおもしろかった。すでに六年間もの作家活動をしていた人なのだが、不覚にもその年、「影武者徳川家康」が話題になるまで、ノーチェックだったのだ。

あるＳＦファンの友人が「影武者徳川家康」はおもしろいと言いだし、ファンタジーファンの友人が氏の処女作「吉原御免状」に感心し、映画マニアの友人がそれに相づちを打ち、時代小説ファンの友人が氏の作品にうんちくをかたむけるといった感じで、ぼくらのあいだでちょっとした隆慶一郎ブームが巻きおこっていた。

時代小説と聞いて、ゲームマニアのきみたちはどんなものをイメージするだろう？　ＮＨＫの大河ドラマのような小説？　あるいは助さん、格さんが活躍する時代劇のような小説だろうか。

伝奇小説という言葉を聞いたことがあるかな。歴史上の人物が登場し、歴史的な事実はふまえながらも、その歴史の陰に潜む物語を自由奔放な想像力の力で紡いでいくのが伝奇小説なんだ。

わかりやすい例をあげてみれば「仮面の忍者　赤影」（最近、アニメにもなったから知っているよね）や、「少年忍者　風のフジ丸」（これはさすがに古い！）の小説版といってもいいだろう。

小説の世界では、山田風太郎の「魔界転生」（角川文庫ででている。必読書だぞ）や半村良の「産霊山秘録」などが伝奇物の代表作だ。隆慶一郎の作品はどれも真正の伝奇小説でありながら、確固たる歴史観に支えられた歴史小説でもあるのだ。とにかく、読めばおもしろい。それだけは保証しよう。

おもしろい本の話というものは自然に盛り上がっていくもので、その夜も気持ちよく盛り上がり、酔っぱらって、仲間たちはすやすやと寝こんでしまった。

なぜか早起きしてしまったつぎの日、日曜日の新聞を何気なく読んで、ぼくは驚いた。とりあえず、仲間たちを蹴り起こして、こう言った。

「おい、隆慶一郎が死んだって書いてあるぞ」

十一月四日、ぼくらが氏の作品を話題にしていたその夜、氏は肝不全のため、六十六年の生涯を閉じられたのだ。本名の池田一朗の名で、シナリオライターとして活躍、六十才で小説家に転じて、わずか五年あまり…。あまりにも短すぎる作家活動であった。

至福の時をあたえてくれる作家の不意討ちのような急逝。やはり、その年に亡くなられた手塚治虫氏の訃報に接したとき、感じたような喪失感があった。まだまだ、おもしろい話を書き続けてほしい。なにか裏切られたような、それでいてやるせない気持ちにおそわれたのだ。

いまは氏の遺作を噛みしめながら読むほかない。



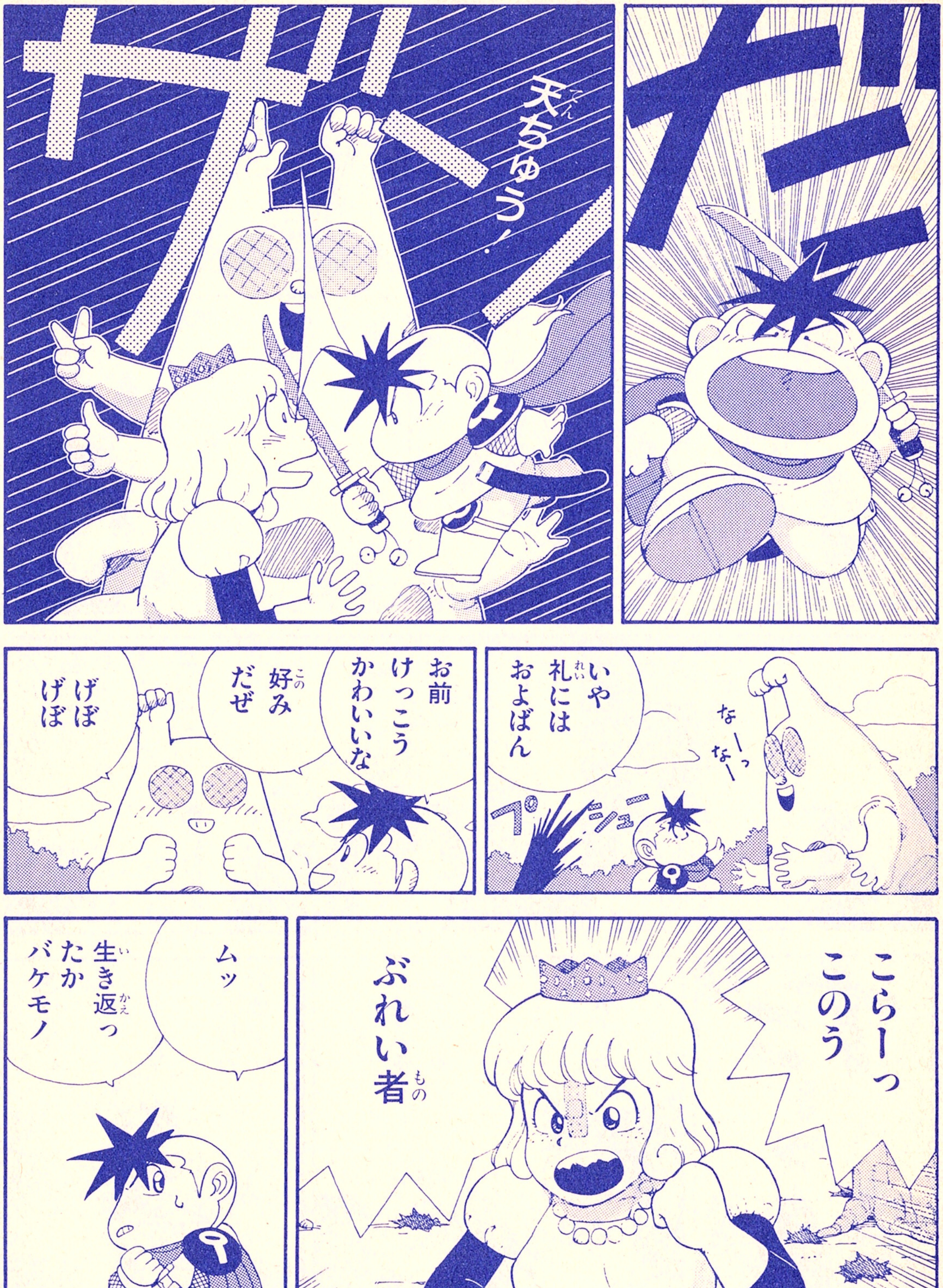
→「花と火の帝（上、下）」隆慶一郎著、日本経済新聞社（各1300円）ちょっと高い本なので、とりあえず唯一の文庫、「吉原御免状」（新潮文庫）を読んで氏の作品世界に触れてほしい。気にいったら、図書館を利用するか、歴史小説好きのお父さんをだまして（？）買わせるのもいいね。

旅を始めたてっぽう丸の前にあらわれたものは!? 新連載第2回!!

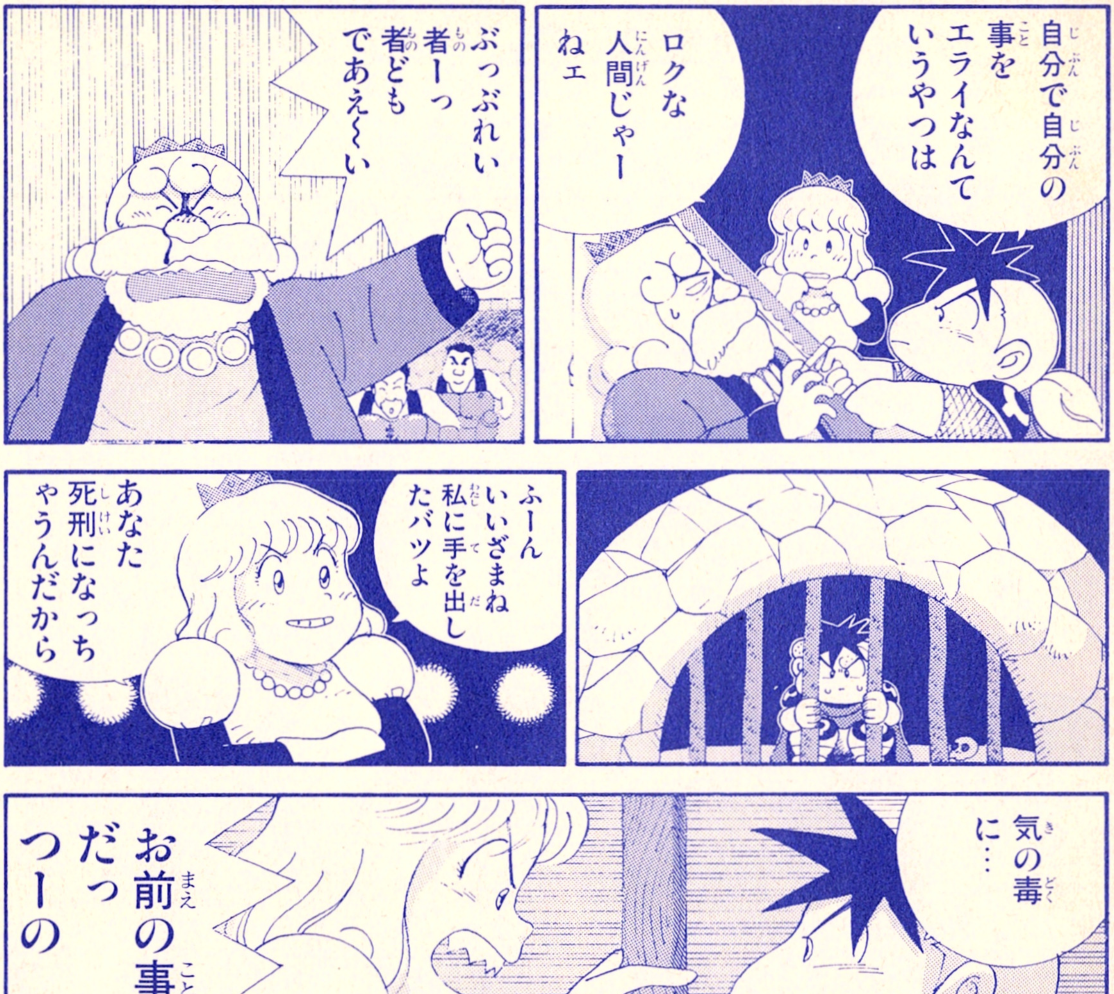


Presented by 品川KID




ダン
ザン
天ちゅう!
いや 礼にはおよばん
なーっ なー
プシュー
お前 けっこう かわいいな
好みだぜ
げぼげぼ
こらーっ このう
ぶれい者
ムッ
生き返ったか バケモノ


とどめ〜〜〜
ドドドド
キャアアアア
ヒョットコキャッスル
天ちゅうくらわしてやる〜〜〜
キャー
パパパパ民間人がいじめるの
一般市民のくせに
じじいてめえが悪の総本山かっ！
ぶれい者っ私はこのヒョットコランドの王じゃ
べっ
王っ
さだはるか？
さだはるではないっ
この国で一番エライ人間じゃ
そーよ一番よ!!2番じゃないのよバーカッ
だーっ



いきなりつかまってしまうとは何事じゃ! 次号につづく!

Come On! Wizardry® World.

小説ウィザードリィ



隣り合わせの灰と青春

ベニー松山・著
定価1010円
漆黒の世界からの覚醒、血潮冷えし肉体に宿る、蒼い魂。評論家各氏賞賛、新世代ファンタジー。小説だからおもしろい!!



ウィザードリィのすべて

ベニー松山・著
定価1200円
ウィザードリィのすべて〜ファミコン版ウィザードリィの完全攻略本！これが、迷宮世界の森羅万象。Ⅰ「狂王の訓練場」Ⅱ「リルガミンの遺産」を収録!!



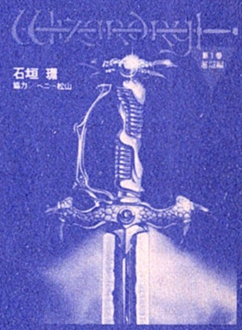
ウィザードリィ外伝第１部

ギルの迷宮

石垣環・作/定価900円

ホウライ国の若き侍、ショウとリルガミンの姫将軍ルーシィディティの宿命の戦いが始まろうとした瞬間、２人の身体は奇妙な迷宮へと転移させられる。彼らは、邪法を用いこの世界の平衡を乱そうと企てる魔導士ギルを斃すために、ここへ召喚されたという。まさにいま、闘いが始まろうとしている！これはもう、コミックを越えたライブ感覚のおもしろさ!!

第１巻 邂逅編 定価906円



第２巻 死闘編 定価906円



第３巻 黎明編 定価900円



コミック版

ウィザードリィ

石垣環・作
ベニー松山・協力
剣と魔法の世界の幕明け。冒険者達の生死をかけた戦いが、いま始まる…。コミックならではの迫力を君に!!

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-234-4621＊価格はすべて税込みです

Wizardry・II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第11回

新たな犠牲者に取り憑き
謎の生命体が女王に迫る。
分裂し、増殖を繰り返す妖獣に対し
ジヴラシアらに打つ手はあるのか。
炸裂する爆炎が天地を焦がす――。



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第十二章〕分裂

俺の右手の指先から血が噴き出した。痺れたような鈍い痛みが、右腕全体を包んでいる。痛覚神経が麻痺しかけているのだ。

無理もなかった。この腕でたった今、一種の真空状態を造り出したのだ。回転半径が最も大きい指先は、瞬間的には音の伝わる速さを超えることになる。

空気を切り裂くだけのスピードと力を捻り出す際に腕の筋肉にかかる負担は、常人の限界を遥かに超える。と言うより、真空波を生じさせるほどの瞬発力を必要とする動作は、忍者というクラス独特の、過酷な肉体改造の末に造り上げられた筋肉だからこそ可能な芸当だ。俺にしたところでマスタークラスと認められて初めて、それも武器の重さのない素手のスピードでようやくこの技が成功するようになった。

しかし、確実性は低い。大気が安定した状態で、全身の筋力をすべて腕の振りに集中させることができなければ、真空は発生しない。

また、成功してもその代償は俺の肉体に跳ね返ってくる。鍛え抜いた腕の筋肉はともかく、通常は考えられない音速を超える動作の負担に、末端の毛細血管や神経繊維が耐えきれないのだ。微細な血管は遠心力による血圧の局部的な上昇によって破裂し、神経は筋肉の激しい収縮で瞬時に疲弊することになる。

真空波で妖獣の息の根を止めたものの、現在俺の右腕は死んだも同然の状態だった。僧侶の強力な治療呪文で回復させなければ、もはや一撃も繰り出せないほどの反動がきている。本来なら、すぐにでもザザに呪文をかけてもらう必要があった。

だが、俺にもザザにもそんな余裕はなかった。

ベイキ女王が玉座に追い詰められているのだ。

闇色の瞳は恐怖で見開かれ、左右に逃げ場を探す余裕もなく正面を凝視している。悲鳴を発した瞬間の形を保った唇は、真冬の外気に晒され

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山〝スケイル〟に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍,ルケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアらは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに迷宮より生還した善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった。ディーとザザの呪文をも退け、肉腫状の本体を現す妖獣。ジヴラシアの放った決死のクリティカルヒットに、さしもの妖獣も絶命したかに見えたのだったが――。

主な登場人物

- ●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ●ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
- ●ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ●ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- ●マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
- ●フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- ●アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- ●エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ●ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ●ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ●,ル ケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡の守護者〟。

続けたかのように蒼白い。

女王の前に、近衛隊の隊長が立ちはだかっていた。女王に対する俺の口のきかたを咎めた、あの厳格そうな髭をたくわえた男だ。片手に抜身のサーベルが鈍い光を放っている。

が、この男が何者かから女王を護っているのではなかった。

衛士長は女王と向き合っていた。そして、ゆっくりと玉座に近づいていく。

その頭部に、血の色をした肉腫が張り付いていた。

衛士長の頭をすっぽりと覆った肉腫が、不気味な蠢動を繰り返す度に少しずつ膨れ、形を整えていく。

あの、妖獣の姿にだ。

衛士長の後頭部にあたる部分の肉腫が弾けた。そこからゼリー状になった血液らしいものがどろりと流れ出し、血まみれになった緑色の球体が姿を現す。

それは肉腫の中から盛り上がると、ぎろりと室内を見回した。

眼だった。

俺の知るどんな生物の眼とも似てはいなかったが、それが俺たちの姿を視覚で捉えていると判る。何故ならそれはアルタリウスの、あの異様な眼と同じ妖気を放っているのだ。

玉座から少し離れたところに、焼け焦げたアルタリウスの頭が転がっていた。が、それは真っ二つに割れ、内部はくり貫いたように空洞になっている。

そこから、ぬめぬめと光る粘液質の跡が大理石の床の上に続いていた。アルタリウスの頭の内部に潜んでいたものが這い出した跡だ。

あの妖獣は、自ら頭部を引きちぎった際に分裂していたのだ。そして俺たちが胴体に潜んだ奴に気を取られている隙に、そいつは労せずして衛士長に取り憑いたのだ。

アルタリウスの躰に一滴の血も残っていなかった訳も判った。この化物は生物の血液を取り込んで急速に変質させ、自分自身の細胞に造り変えてしまうのだ。衛士長に張り付いた肉腫が血の色をしているのは、この男の中にまだ大量に残っている血液を盛大に吸い出し、増殖している最中だからだった。

アルタリウスの場合は内部からこの妖獣にあらかた同化され尽くし、半ば抜け殻のような状態だったのだろう。ノームの皮を被った化物が、デスマスクの内側からあの緑の眼球で俺たちを覗いていたのだ。

衛士長の後頭部に生えた眼球は、俺の姿に目を留めたようだった。

「ジ……ジヴラ、シア、だな」

背を向けたまま、衛士長がたどたどしく言った。肉腫はすでに脳内の神経系を冒しているらしく、この男はもはや妖獣の操り人形と化していた。

「よく、も仲間、を殺った、な。ばば、罰だ……お前の、私の、女王、を、代わりの仲、間にして、くれる、ぞ……」

言いながら、なおも一歩、一歩と衛士長はベイキ女王に迫っていく。

止めようにも、ザザやディーの呪文を使うにはすでに女王に接近し過ぎている。猛炎のような中規模攻撃呪文では確実に女王も効果範囲に巻き込んでしまうだろうし、単数攻撃呪文も女王に当たる危険が大きい。

俺も、咄嗟には動けなかった。今の一撃で右腕は使い物にならなくなり、全身の筋肉も軽い弛緩状態にあるのだ。もう一匹いると考えずに真空波を使った俺のミスだ。

緑の眼球が、身動きできない俺たちを嘲笑うように歪んだ。ふらりと、しかし確実な殺意を持って、サーベルが女王に向かって振り上げられた。

「逃げ――」

俺が叫ぼうとした時、鋭く光るものが空気を裂いて後方から視界に入ってきた。

次の瞬間、それは吸い込まれるように肉腫の眼球に深く突き立った。

柄に細かい象牙の細工が施された短刀が、衛士長の後頭部に刃の付け根まで埋まっていた。

「JUAAAアァァァ――」

言葉にならない絶叫とともに、衛士長はサーベルを取り落してのけぞった。

短刀は死点に当たってはいなかった。妖獣はすぐに回復するだろう。

チャンスは、この一瞬。

俺は死力を振り絞って、緩む筋肉を奮い立たせた。そして、疾った。

通常の七割程度の力しかこもらない肉体がもどかしい。が、スピードは乗っていた。のたうつ衛士長の横をすり抜け、俺は瞬時に玉座に達した。

怯えてすくむベイキ女王を左腕で抱え、俺は玉座の横方向に跳躍しながら叫んだ。

「ディー、爆炎だ！　こいつは生焼けじゃくたばらねえ！」

そのまま俺は壁際まで疾走した。この呪文の効果範囲は猛炎よりも遥かに広い。巻き込まれては華奢な女王ばかりか俺の命も危うい。

壁にタペストリーごと蹴りを入れるようにして勢いを殺し、俺は女王を抱えたまま振り返った。

衛士長が起き上がろうとする姿が見えた。顔面は肉腫がべったりと張り付き、眼窩や鼻孔、耳孔から内部に潜り込んでいる。まだ子供に等しい女王が恐怖に呑まれたのも無理からぬおぞましさだった。

視界の隅で、ディーが構えを取っていた。両腕を胸の前で交差させ、指で複雑な印を結んでいるのが見てとれる。

ディーの方向から突風が吹きつけ、ベイキ女王の長い髪をなぶった。呪文が呼び起こされる直前に放射される魔法風だ。

風を感じたのとほぼ同時に、閃光が衛士長を包みこむ。それが一瞬にして膨れ上がり、爆発する。

衛士長を中心に、直径十数メートルの円形の超高熱火炎が発生した。炎の壁が噴き上がり、先刻の猛炎が子供の焚き火に思えてくるほどの熱波が激しく肌を打つ。

何者をも焼き尽くす異界の炎。魔術師系最高位の第七レベルに属する、現在知られている魔法の中では最大の破壊力を秘めた広範囲攻撃呪文・爆炎だった。

猛炎などの火炎系の呪文が敵を外部から燃焼させて破壊していくのに対し、この爆炎は爆発の衝撃波で相手を紛砕し、一千度を超える超高熱火炎で一気に灼き尽くす。呪文の無効化能力か、熱に対する高い耐性でも持っていない限り、並の生物がまともにこの炎を浴びれば一瞬にして炭化してしまうだろう。

炎の壁が持続する数秒の間、俺はあの妖獣が脱出する事態を警戒して燃え盛る火炎の海を睨んでいた。女王は俺に横抱きにされたまま、惚けたように炎が躍るさまを見つめている。

炎の壁が次第に低くなり、加速的に火勢を失なっていく。そして唐突に魔法の炎は消え失せた。

高熱に焙られて円形に変色した床の中央に、ほとんど灰と化した衛士長の屍が転がっていた。胴体はまだ形を保ってはいるが、風が吹いただけで崩れそうなほど徹底して炭化していた。恐ろしいまでの爆炎の威力だ。

周囲も酷いありさまだった。爆炎の効果範囲内に完全に入っていた玉座は無残に割れ砕け、それが人の座する場所であったことすら判らない。玉座の後方の壁にも炎が達し、高価なタペストリーの数々が焼け焦げてしまっていた。だが、それでも、聖王家の最後の血筋を護るためには安い代償だろう。

炭化しきった屍には、もはや生命の痕跡は見られなかった。いや、少なくともその時は誰もがそう考えていた。

「ははっ。あまり人を舐めるんじゃ——」

自分を鼓舞するようにディーが口を開いたその時、小さな哭き声が聴こえたような気がした。ディーがそこで言葉を途切れさせたことで、その場にいた全員が、それが自分だけの空耳ではないと知った。

今度ははっきりと、あのガラスを掻くような哭き声が静まり返ったホール内に響いた。それも、屍の胴体の中からだ。

「まさか、まだ——」

震える声で言いかけたディーが、再び絶句した。屍の腹部の表皮がぼろぼろと崩れ始めたのだ。

俺の腕の中で女王が失神した。むしろ今まで良く持ったと褒めてやりたいところだ。こんな怪物の相手は十七歳の小娘には荷がかち過ぎる。


Masaki

ぎちっ、という歯を噛み合わせるような音とともに、死体の腹が割れた。そして、人の握り拳大のピンク色の肉腫が、腹を突き破って宙に一メートルほど跳ね上がった。

信じ難い生命力だった。爆炎に包まれた瞬間に、肉体の一部を分裂させて口から衛士長の内臓に潜り込ませたのだ。

だが、跳躍が頂点に達した瞬間、肉腫は大きく弾かれた。そしてそのまま床の上に落下し、潰れて広がるとそれはもうぴくりとも動かなくなった。

見ると、ザザがいつもの笑っているような表情を取り戻していた。

ザザの大滅が、今度こそ完全に妖獣を絶命させたのだった。

「……殺っ、たか……？」

絞り出すようなか細い声が、息も絶え絶えにホールの扉付近から聞こえてきた。

一斉に視線を向けた俺たちの目に、扉にもたれるようにして辛うじて立っている血まみれの男の姿が映った。

全身を包む銀色の鎧は血がこびりつき、何か凄まじい圧力を受けたのか酷くひしゃげて中の肉体を圧迫しているようだった。その鎧を外すためには徹底的に分解しながら剥ぎ取っていくしか方法がなさそうなほどで、場所によっては一体どのようにしたら装甲板にこんな穴が開くのかと目を疑いたくなるような損傷が見られる。そして今もその穴から血がどくどくと溢れ出しているのだ。

女のような美しい貌はやつれ、頬には呪文で治癒しかけてはいるものの、明らかに鋭利な爪で切り裂かれたらしい数本の傷が走っていた。肩まで伸ばした金髪は血と汗で見る影もなく縺れている。

まるでホールに入ってきた時のアルタリウスを思わせる姿だったが、眼が違っていた。疲労と苦痛を滲ませながらも、男の双眸には怒りと復讐の炎が暗く燃えている。

「マイノス！」

ディーが叫ぶ。名を呼ばれた安心感からか、マイノスは力尽きてその場に頽れた。

俺は腰を抜かしていない衛士の一人を呼びつけて気を失ったままのベイキ女王を託すと、ディーとザザに続いてマイノスのもとに駆け寄った。

仰向けに床に寝かされながら、マイノスは焦点の合わぬ瞳で俺たちを見回していた。倒れた際に一度軽く気を失ってから、すぐに目を覚ましたらしい。

近くで見ると、この男がどれほど深い傷を負っているのかがはっきりと判った。全身に打撲と裂傷が刻まれ、見る間にも床に血溜りが広がっていく。籠手の潰れかたから見て、右掌は骨までぐずぐずに砕かれているようだった。意識があるのが不思議なほどの激痛に苛まれていることだろう。

女王の命を救ったあの短刀を投げたのは、マイノスだった。この状態でよくも、あれだけ威力のこもった短刀を正確に投げてのけたものだ。

俺に見つめられているのに気づいて、マイノスの目が急速に焦点を取り戻した。慌てて上体を起こそうとするが、激痛が疾ったらしく苦しげに呻く。

「動かないで。生きているのが不思議なほどの重傷ですよ」

ザザが片膝をつき、細心の注意を払ってマイノスの躰を調べていた。

「何故これだけの傷を放っておくんです。ロードのあなたが？」

「……治療、呪文は……全て使い、切った……」

言ってマイノスは咳き込んだ。口元からわずかに鮮血が溢れる。

「訊きてえことだらけだが、傷の治療が先決だな」

俺はザザに言った。「先刻の借りがある。快癒をかけてやってくれ」

快癒とは僧侶系第六レベルの呪文で、体内の毒素を消し去るばかりか麻痺・石化症状をも癒し、損傷した肉体をも瞬時に全快させる奇跡的な治療回復効果を持っている。この呪文さえかけておけばマイノスの生命の心配はないだろう。

「はい。ただし腕の良い鍛冶屋も必要ですね。このまま呪文をかけても鎧に躰を挟まれます。鎧を壊さなければ――」

「俺のことはいい！」

突然マイノスが叫び、ごふっと大量に血を吐いた。が、無理にでも喋

り続けようとする。

「おい、喋るな。すぐに助けてやる」

「エ、レイ……」

掠れた呻きが、しゃがみかけた俺の耳に飛び込んできた。

「何だと？」

「エレインだ……あいつは、どこだ――」

再び焦点を失いかけたマイノスの瞳に、烈火の如き怒りの色が浮かんだ。「あいつ、も……アルタリウスと同じ……化物だ。斃、せ！　もうエレインじゃあ、ない――」

すでに俺は立ち上がっていた。

もっと早く気づくべきだった。エレインとアルタリウスは二人で戻ってきたのだ。

あの底なしの耐久力と運動性、そして分裂増殖能力まで兼ね備えた妖獣を相手に勝つことができたのは、ここが遮蔽物のほとんど存在しない開けたホールだったからだ。だからこそ俺は真空波を繰り出すことが可能だったし、強力な攻撃呪文も容易に狙いがつけられたのだ。

しかし、これがもっと妖獣が隠れやすい場所だったとしたら――例えば冒険者の宿のように、部屋が多く入り組んだ造りの建物の内部だとしたら――。

「ザザ、マイノスについてろ。ディーは馬で来い」

叫んでホールを飛び出そうとした俺の左腕をザザが摑んだ。

「この腕一本でどうしようというんです。あなたにも快癒が必要でしょう」

「時間が惜しい」

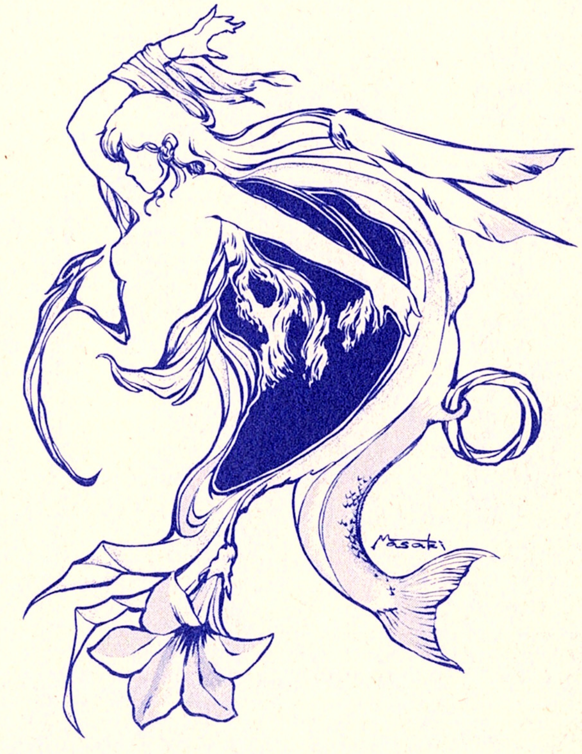
「なら転移で跳ぶわよ。ここからの正確な座標を割り出すのに一分、その間に癒しておいて」

そう言ってディーが瞑想を始めた。王宮から宿までの方角と距離を測っているのだ。

快癒の効果が俺の肉体に活力を注ぎ込むのを感じながら、俺の気は急いていた。冒険者の宿に向かったエレイン――妖獣の狙いはひとつしか考えられない。

それは、残っている冒険者たちの一掃だった。

（次号につづく）



あとがき

前回に引き続いて、ちょっと『LYNX』の話をしてみたい。

購入された方は御存知だろうが、あれのゲームソフトについているマニュアルは凄い。残念ながら悪い意味でだが、凄い。何しろ近年お目にかかったことがないような、英文直訳の説明文なのだ。"カリフォルニアゲームス"の中の「サーフィンがカリフォルニアの海岸線を支配している」という下りは必見の価値があるかも知れない。

ものによっては、操作法もほとんど説明になっていないのだ。身体で覚えろという豪快なアメリカの気風を日本に持ち込もうと、そこまで深い計算をしているのか。そんなわきゃない。訳しているのは日本人だ。

そう言えば、このいい加減な訳し方のノリは、昔まだウィズがアップル版しかなかった頃の和訳マニュアルにそっくりである(笑)。いや、笑い事じゃない。

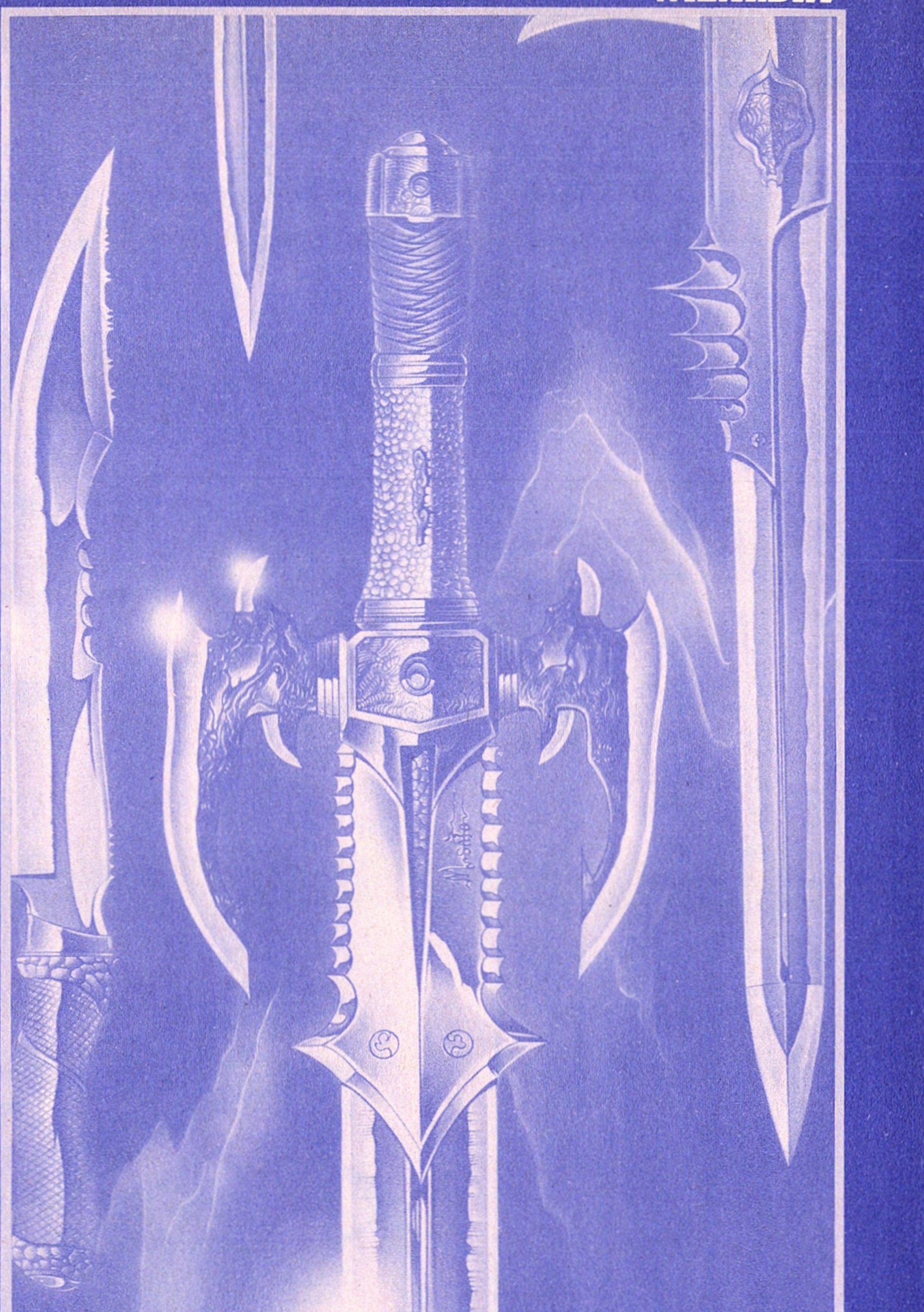
燃えろ、燃えてくれ、株式会社ムーミン！

やばいぞ、ホントに。

（ベニー松山）

特報!!
ウィザードリィ外伝①ギルの迷宮
絶賛発売中!!書店へ急げ!!

●巻末特別企画として、ベニー松山責任編集ザ・ベスト・オブ・ウィザードリィ友の会がついてきます!!お見のがしなく!!(定価九〇〇円税込)



▶ファンタジーランドは(P81)からお読み下さい。